

2013年スケジュール

2013年6月20、21日

全国油症治療研究会議

ホテルレガロ福岡〔福岡県福岡市〕に於いて開かれました。

全国油症一斉検診

下記の11班により年に1回実施しています。

昨年の研究成果

2013年6月20、21日に全国油症研究会議が開催されました。多数の基礎的・臨床的研究の報告が行われました。その概要をご紹介します。

平成25年度全国油症治療研究会議より 〔その1〕

毎年油症検診結果の集計を行っています。受診者の健康管理のため、また毎年の集計結果の積み重ねにより判明する症状の傾向や変化を治療研究に活かすために行っています。

福岡県保健環境研究所管理部企画情報管理課の高尾佳子先生は全国油症検診集計結果(概要)について報告されました。

<報告内容>

2012年度の全国油症一斉検診の受診者は659人で、検診票が統一された1986年以降、最も多い受診者数でした。60歳以上の割合は前年度(2011年度)と同様に6割を超えていました。検診項目を統一して実施した1986年以降の検診において、今回初めて受診した者は101人でした。受診者のうち、未認定者の割合は、血液中の2,3,4,7,8-ペンタク

ロジベンゾフラン(PeCDF)が診定基準へ補遺された2004年度以降、増加傾向を示しています。

内科の自覚症状に関しては、「全身倦怠感」や「関節痛」の訴えが高く(約7割)、他覚所見では、「肝胆脾エコー」(約7割)、「心電図」(約3割)の順に有所見率が高値でした。皮膚科は、問診で一番訴えの多かった項目は、「かつてのど瘡様皮疹」でしたが、5割を下回っていました。他覚所見では、各項目において2割を下回っていました。眼科は、「眼脂過多」の訴えが約2割ありましたが、他覚所見では各項目1割を下回っていました。歯科は、「辺縁性歯周炎」の有所見率が約4割と最も高く、次いで、「色素沈着(歯肉)」が約3割でした。

各科の有所見率は、近年同様の傾向を示しており、2012年度も自覚症状や問診項目の訴えは多く、他覚所見においては有所見率が低い傾向でした。

福岡県保健環境研究所保健科学部生活化学課の梶原淳睦先生は平成24年度油症患者さんの血液中PCDF等の測定結果について報告されました。

<報告内容>

平成24年度全国油症検診のPCDF等測定者は、油症認定患者さんが132人、未認定者が249人の計381人でした。この他に過去にPCDF等濃度を測定したことがない、五島市の油症認定患者さん7名の血液中PCDF等濃度を測定しました。未認定者のPCDF等測定者は平成22年度に初めて200人を超えた以降も増え続けています。また、平成21年度から過去にPCDF等濃度を測定したことがない油症認定患者さんの血液中PCDF等濃度の測定を開始しており、平成24年度も長崎で7名の油症認定患者さんの血液中PCDF濃度を新たに測定しました。

平成24年度の全国油症検診の血液中PCDF等測定結果は、油症認定患者さんの血液中2,3,4,7,8-PeCDF濃度の平均は120 pg/g lipid、未認定者は19 pg/g lipidでした。未認定者のうち2,3,4,7,8-PeCDF濃度が50 pg/g lipid以上の方は8人でした。

裏面もお読みください。→

平成25年度 自治体連絡先

福岡県班 (福岡県、大分県、宮崎県)
福岡県保健医療介護部保健衛生課食品衛生係
TEL: 092-643-3280

長崎県班 (長崎県、佐賀県、熊本県)
長崎県県民生活部生活衛生課食品乳肉衛生班
TEL: 095-895-2364

関東以北班 (東京都、川崎市、埼玉県、さいたま市、茨城県、横浜市、神奈川県、栃木県)
神奈川県保健福祉局生活衛生部食品衛生課 食品衛生グループ
TEL: 045-210-4943

千葉県班 (千葉県)
千葉県健康福祉部衛生指導課企画調整班
TEL: 043-223-2638

愛知県班 (岐阜県、静岡県、愛知県、三重県)
愛知県健康福祉部健康担当生活衛生課食の安全・安心グループ
TEL: 052-954-6297

大阪府班 (滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県)
大阪府健康医療部食の安全推進課安全推進グループ
TEL: 06-6944-6703

島根県班 (島根県、鳥取県)
島根県健康福祉部薬事衛生課食品衛生グループ
TEL: 0852-22-5264

広島県班 (広島県、岡山県)
広島県健康福祉局食品生活衛生課
TEL: 082-513-3104

山口県班 (山口県)
山口県環境生活部生活衛生課 食の安心・安全推進班
TEL: 083-933-2974

高知県班 (愛媛県、高知県、香川県)
高知県健康政策部健康対策課
TEL: 088-823-9678

鹿児島県班 (鹿児島県、沖縄県)
鹿児島県健康福祉部生活衛生課 食品衛生係
TEL: 099-286-2786

平成23・24年度に行った遺伝子検査結果と、平成20(2008)年度に厚生労働省が実施した「カネミ油症患者実態調査」結果との関係の分析を始めました。

奈良県立医科大学健康政策医学講座の赤羽学先生は油症患者さんにおけるAhR遺伝子多型の分析について報告されました。

<報告内容>

油症患者さん220名(男性:118名、女性:102名)における調査結果をもとに、性別、年齢階級別にAhR遺伝子多型を分析したところ、CC型が97名、CT型が91名、TT型が30名でした(2名は不明)。年齢階級別にみると、男性においては各遺伝子型の10歳階級別頻度には明らかな差は見られませんでした。女性ではTT型が高齢者群(特に60~79歳)で低値でした。合わせて2008年厚労省調査における症状(脳卒中、心筋梗塞、高血圧等)の有無とAhR遺伝子多型の関係を分析しましたが、いずれの症状も「有」の患者が少なく明らかな傾向は見られませんでした。今回分析した多型は、AhRプロモーター領域の多型で、TTの場合にCYP1A1の発現が高まるとされているものです。

油症検診の集計結果等から得られた油症患者さんの症状と、血中ダイオキシン類濃度との関連を調べています。油症患者さん特有の症状を見出し、治療研究に活かすために行っています。

東京大学大学院医学系研究科社会医学専攻の神奈川芳行先生は油症患者さんのダイオキシン類の体内負荷量変化率の変化に関する研究について報告されました。

<報告内容>

2つの異なる期間(2001年~2006年;326名、2002年~2010年;395名)に血中ダイオキシン類濃度を3回以上測定した患者さんを対象に、各患者さんの濃度の変化率を求めました。2001年~2006年に得られた濃度の変化率では、これまでの研究と同様の10年程度の半減期の患者さんと、濃度がほとんど減少しない半減期が無限大に近い患者さんとに分かれました。2002年~2010年の期間に得られた濃度の変化率では、半減期が10年程度の患者さんが少なくなり、濃度がほとんど減少していない患者さんが多くなっていました。

福岡市立こども病院産科の月森清巳先生は油症患者さんより出生した次世代のアレルギー性疾患罹患に関する検討について報告されました。

<報告内容>

カネミ油症発生後に油症患者さん(母体)より出生した児のアレルギー性疾患(気管支喘息、アトピー性皮膚炎、アトピー性鼻炎)の有病率について調査し、母体血中ダイオキシン類濃度との関連について検討しました。

油症発生後に油症患者さん64例より出生した児117例のなかで、気管支喘息は11例(9.4%)、アトピー性皮膚炎は16例(13.7%)、アレルギー性鼻炎は11例(9.4%)に認め

られました。母体の血中ダイオキシン類濃度と児の気管支喘息およびアトピー性皮膚炎の発症との関連はありませんでしたが、母体の血中ダイオキシン類濃度が10倍増加すると児のアレルギー性鼻炎の発症リスクは0.37倍に低下する傾向($p=0.080$)を示しました。

これらの成績から、カネミ油症患者さんより出生した児では一般健常人と比較して気管支喘息有病率が高く、逆にアレルギー性鼻炎有病率は低い傾向にあることが示されました。また、高濃度の母体ダイオキシン類曝露では児のアレルギー性鼻炎の発症リスクは低下する可能性があることが示されました。今後、カネミ油症発症後に油症患者さんから出生した次世代の健康状態を注意深く見守ることが重要であると考えられました。

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚病態学の楢塚大先生は油症患者さんの血中Heat shock protein 27の検討について報告されました。

<報告内容>

高PCB血症を示すカネミ油症患者さんは以前の研究において酸化ストレスの影響を受けていることがわかっています。酸化ストレスはHeat shock protein(Hsp)に誘導をかけることが種々の研究で判明してきています。今回、Hspの中でHsp27に注目し、油症認定患者さんと正常健常人血清を用いてHsp27を測定しました。油症認定患者さん39名、健常人39名において血清Hsp27値を測定しました。その結果、油症認定患者さんで 2.58 ± 0.91 ng/ml、対照群では 6.49 ± 2.14 ng/mlの値を示しましたが両者間に有意差を認めませんでした。

九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センターの峯嘉子先生は油症認定患者さんにおける抑制性サイトカインIL-35の検討について報告されました。

<報告内容>

ヘルパーT細胞サブセットであるTh17細胞やTreg細胞に、ダイオキシン類の受容体であるAhRが関与していることが報告されています。以前我々は、長崎県玉之浦地区油症認定患者さんにおいて、血清中IL-17値の上昇を見出しました。今回我々は、Treg細胞から産生され、抑制性サイトカインとして機能しているIL-35に関して検討を行いました。具体的には2005年から2009年に施行された長崎県油症検診受診者のうち、同意を得られかつPCB、PCQ、PCDFの測定を行った油症認定患者さん26名および年齢を合わせた健常人26名を対象としました。

その結果、油症認定患者さん26名、健常人26名において血清中IL-35はそれぞれ 76.0 ± 15.7 pg/ml、 51.0 ± 16.2 pg/mlと、有意差($p < 0.01$)をもって油症患者さんで高値を示しました。

昨年の研究成果の概要は、油症ニュース21、22号に続きます。